

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊27年目
創刊1989年 Nr.316

GEKKAN-WIEN 2015年10月号

Adriaen Thomas Key
(1544 Antwerp)
Weibliches Bildnis
1575
Kunsthistorisches
Museum, Wien

GANYMED DREAMING

Jacqueline Kormmüller
演出で、美術史博物館の
絵画を背景に演劇、音楽、
ダンス。
9月30日プレミエ
10月10、21、28日
11月4、11、18、28日
12月2、9、16日
19:00-22:00



アドリエントーマス・
ケイ「婦人像」の前
で「プーチン Putin」
と題して、
Martin Pollack 台本
Johanna Doderer 作曲
Angelika Kirchschrager
が歌う。





杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 49



原子炉熱流動に関する国際会議が八月三日〜九月四日にかけて、米原子力学会の主催、日本原子力学会など六機関の共催によりシカゴで開催された。この会議は原子炉熱流動に関する研究、開発、応用における最新の進展について発表・討論する世界最大規模の会合である。一九八〇年米国で第二回会合を開催して以来ほぼ二年毎に開催され、今回で十六回目を迎えた。我が国では一九九七年に京都二〇〇九年に金沢で開催されている。世界五ヶ国から約七百人の参加があり、ポスター発表を含めて六七七件の論文発表があった。我が国からは、産業界、研究所、大学等から四一人の参加があり、三七件の発表があった。京都大学からは同僚の功刀教授、原子炉実験所の伊藤助教と筆者が参加した。全体に若手の参加が多いことが特徴的である。

筆者は十二件ある招待講演の一つとして、二日に「福島第一原子力発電所事故後の日本におけるシビアアクシデント研究」と題する二時間の講演を行った。早朝にも関わらず百名近くの聴衆が参加して熱心に聴いてもらい、活発な質疑応答があった。開会セッションで特別

シカゴでの国際会議の聴衆



講演をしたセカール教授、会議の副議長を務めたコラデーニ教授など、シビアアクシデント研究分野のトップ研究者と再会出来たのが嬉しかった。開会特別講演や若手の発表、他の特別講演で多々質問をすることにより、会合の活性化に少しは貢献したように思う。シカゴは九四年以来ほぼ二十年振りだったが、中国、韓国から教授であるかつての原子力機構の研究室仲間二名と旧交を温めたことが個人的な特記事項である。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の森について述べてみたい。ウィーン北部から西南部に広がる森は、面積は約三三〇平方キロメートル、アルプス山系の最北端に位置する。ウィーンの森には、一千種類の植物、二五〇種類の野鳥が生息し、その他多くの絶滅危惧種が生息している。この広大な森林・丘陵地帯には、五の自然保護区と四つの自然公園があり、草原、放牧地、ブドウ園など変化に富む風景が続いている。豊かな自然と伝統文化の溶け合った優れた環境は、二〇〇五年以来ユネスコの生物圏保護区に指定されている。市街北方の標高四八四メートルのカーレンベルクからは、ウィーンの森と市街の見事なパノラマを眺望することができる。一方、三方を山に囲まれている京都市は、六二〇平方キロメートルの森林を有し、市総面積の七四%を占める程森が多い。京都府内には約三千種の植



物 約七千種の動物が生息している。京都市では、動物約一七〇種、植物約二八〇種が絶滅危惧種に分類されており、一四の鳥獣保護区と六カ所の銃使用禁止区域を設けている。右京区の北山地方、北区中川を中心とする地域は、室町時代から茶室・数寄屋の建築用材として重用された北山杉の産地として栄えた。ウィーンと同様、市街北東の標高四七二メートルの太文字山からは、京都の森と市街の見事なパノラマを眺望することができる。両市の森は長い伝統・文化と調和し、市民に憩いの場を提供しているのが共通している。余談であるが、筆者はウィーン赴任中、マイヤリンクのあるウィーンの森南西部を訪れたことがある。カーレンベルクの丘には何度も車で登った。京都の森は大文字山には学生時代から何度か登り、北山杉も訪れることができた。両市の森を紹介できた幸運に感謝しつつ、カーレンベルクから描いたスケッチを掲載させていたたく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■